

ずいそう

経営もゴルフも“乾坤一擲”は程々に

渡辺 総悦



北海道のゴルフシーズンは、5月から10月までの半年間。しかし10月中旬ともなれば、小雪舞う中で鼻水をすすり上げながらのプレイとなることもしばしばです。スコアが良ければまだしも、次第に寒さで体が回らなくなり、楽しいはずのゴルフがやがて難行苦行の場となることも。温暖な地方の皆さんがうらやましい限りです。

そんなこともあって、平成27年の私のプレイは10月上旬には終了。春先こそ「今年は飛躍的なスコアアップを」と意気込んでいましたが、プレイを重ねる度に己の未熟さを思い知らされ、最後にはいつものように厳しい現実と向き合う結果になりました。不遜にも年間平均スコアで2つ3つのアップを目論んでいたのですが、本当に甘かったです。

それにしてもゴルフとは不思議なスポーツです。これが陸上や水泳なら、タイムアップ出来ないのは、ひとえに鍛錬不足や体力不足が原因。それに年齢が加われば容易に諦めが付きます。ところがゴルフの場合、練習不足も体力の衰えも十分過ぎるほど自覚し、年齢だってもうとっくに還暦をすぎているのに、なかなか自分のスコアが腑に落ちません。

ティーショットは、スライスして右のラフへ。西洋芝の粘っこいラフの中で無謀に握った5番アイアンは振りぬけず、7番アイアンもダフリ、パターを使ってやっと4オン。これに2パットを加えてダブルボギー。いつもそんな調子なのに、「こんなはずでは」と思い続けられる私がおかしいのでしょうか。

ただゴルフの場合、ショットの技術以上にコース・マネージメントがスコアを左右します。なかなか自分のスコアに諦めがつかないのも、そんなことがあるからでしょう。

ある日のプレイでのことです。場所は札幌近郊の『チサンカントリー-銭函』の13番ホール、609ヤードパー5。ここは石狩湾に向かう豪快な打ち下ろしコースで、フェアウェイの途中を大きな沢が横断している名物ホールです。まるで沢の前後にあった2つのコースを1つに作り直した様な風情、大変なコースです。

さてティーショットは運良くフェアウェイをキープし、斜面を転がって230ヤードのナイスショット。と

ころがボールの止まった場所が、左足下がりとつま先上がりの難しい斜面。前方50～90ヤード付近は起伏の少ない平場になっているものの、更にその先には大きな沢が口を開けて待っています。沢を確実に越えるためにはキャリーで140ヤードは欲しいところ。平均スコアでようやく100を切るレベルの私、2打目はどう打てば良かったのか。

- ①斜面でウッドは無謀。ただ残りの距離も十分あるので、5番アイアンを短く持って、出来る範囲で遠くに運ぶ。
- ②何はともあれ沢を越すのが最優先。7番アイアンで強振せずに確実に。
- ③ショートアイアンで沢の手前の平場に刻む。

その時の私は②を選択し7番アイアンを手にしましたが、結局はダフってあえなく谷底へ。振り返って見れば、ティーショットを打ち終わっても、まだ残りは380ヤード。この距離をあと2打で乗せるなんて、真っ平らなフェアウェイからでも私には不可能なことでした。グリーンまで少なくともあと3打が必要なら、足場が悪く谷底に落とす危険性の高い2打目こそ刻むべきでした。一体あと何打でグリーンに乗せようとしていたのか。最も避けたい事態とは何だったのか。ゲームを左右する厳しい場面で“あやふやな選択”をしたために、スコアを大きく崩す結果になってしまいました。

一方、春先には工事受注の期待に意気込み、しかし入札のたびに結果を突き付けられ、そして秋には否応なく現実と向き合う。厳しい状況の中でもそれなりの成果を出すためには、やはりマネージメントが必要。そう、経営ってゴルフと似ていませんか。なかなか自社の行く末を絞りきれないのも、様々な状況に対応しているいろいろな選択肢があり、その時々でのマネージメント次第では一打逆転だってあるから。

ただ残念なことに、実力とかけ離れたナイスショットなんて、そうそう出るものではありません。経営もゴルフも“乾坤一擲”は程々に。やはり林に入れたボールは、横に出すのが一番じゃないでしょうか。